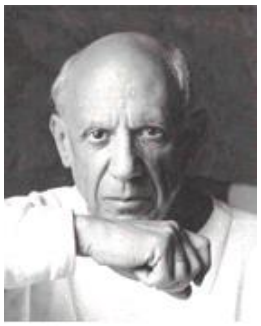
あしたのために

四日市市立朝明中学校
１年生学年通信
令和元年６月18日（火）
その35　　文責（浅野）

自主自立！

基礎

～ピカソから学ぶ～



美術の授業でピカソを習いましたね。有名な作品「ゲルニカ」を見たようですね。「怖い」「泣いている」「悲しそう」などなど、中には「自分にも簡単に描けそうだ」なんて感じている人もいたようです。

このピカソという人は油絵と素描（デッサン）で13,500作品、版画で100,000作品、挿絵で34,000作品と、世界で最も多作な画家としてギネスブックにも載るほどの芸術家です。ナチスドイツを批判したことで有名な『ゲルニカ』や『泣く女』など数々の作品を残した人です。実は、ピカソ….本名がものすごく長いのです！知ってました？

『パブロ・ディエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ』

っていうんだそうです！名前も芸術的で素敵ですね！ちなみにピカソ自信も自分のフルネームを覚えられなかったとか・・・

「泣く女」

さらにピカソは「もてもて」だった！アトリエでピカソのことを好きな女性同士がけんかをしたそうです。女性同士はもめました。もめた女性をさらにピカソはけしかけるのです。「おれのことが好きなら勝て！」　なんて人なのでしょう。そこで泣く女性を描いた絵が**「泣く女」**なのですね！

さて、このような様々なエピソードを持つ天才画家ピカソは「独特な特徴のある絵を描く人」という印象を持っている人は多いのではないでしょうか？しかし！

「ピカソは、抽象的な絵を描くけど、実は写実的なデッサンがすごくうまい！そういう基礎があってこそ、抽象的な絵が描けるのだ」とあります。

デッサンとは「絵画の基礎」を学ぶ方法のひとつです。ピカソは、天才画家として名高いですが、少年時代はデッサンの練習で使った紙が膨大な量になり、その紙で、ひと冬の間ストーブを燃やせたそうなのです。

そのピカソのデッサンがこの13歳～14歳の頃の作品⇒

「男性頭部石膏像のデッサン」
鉛筆と木炭（14歳）

「女性頭部石膏像のデッサン」
鉛筆（13-14歳）

ピカソもまた天才！「天才」と言われる人と、そうでない「普通の人」との違いは、素質ではなく、**「それにかけた時間」**の差でしかないということなのです。改めて人は**「天才に生まれる」のではなく、「天才になる」**のだなあと思いませんか？

さあ、明日は期末テスト発表です。天才になれとは言いません。ただ、少しでもいい結果を目指すなら、**それにかける時間が必要**ということです。今日の話から言うと、ピカソから学ぶべきことは、やはり**「基礎」に時間をかける**ことは大切であるということです。

６月１８日は四日市空襲の日

１９４５年８月１５日、日本は終戦を迎えました。同年の３月１０日未明、東京に約３００機のアメリカ軍爆撃機Ｂ２９が飛来し焼夷弾（しょういだん）が投下され、約１０万人が犠牲になりました。８月６日には広島に、そして９日には長崎に原子爆弾が投下され、そこでも多くの人が犠牲になったのです。日本は原子爆弾を投下された唯一の被爆国です。

四日市にも空襲がありました。１９４５年６月１８日未明、四日市はアメリカ軍の戦略爆撃機Ｂ２９による空襲を受けました。これは、東京、大阪、名古屋などの大都市に続く、地方中小都市空襲の最初でした。およそ１時間にわたる爆撃の被害は、死者 736 名、重軽傷者 1,500 名、行方不明 63 名、被災者 47,153 名といわれています。この後も８回の空襲があり市街地は廃墟となりました。

四日市空襲殉難碑（諏訪公園）

私自身、亡くなった祖父からよく戦争のことは聞かされましたが、実際の戦争はもちろん知りません。終戦から今年で７４年目を迎えます。戦争を知らない世代が社会の中心に立っている今、科学の技術はどんどん進歩し、世界では核兵器やさまざまな武器が作られ、問題となっています。実際にテレビやニュースでも争いの耐えない国をよく目にします。『核』や『爆弾』『テロ』という言葉を当たり前のように耳にする時代となってしまっています。

有名なライト兄弟が飛行機を飛ばしたとき、**「これで戦争はなくなる」**と語り、飛行機の平和的利用に力をいれていたそうです。しかし半世紀も経たぬうちに、爆弾を落とす道具となっていくのです。自分の発明品がこのように使われることが避けれないと知り愕然としたのです。死の直前、ある新聞にこう語っている。**「私たちは浅はかにもこの世に長い平和をもたらしてくれるような発明をと願っていました。ですが、私たちは間違っていたのです」**

発明家であるアルフレッド・ノーベル（ノーベル賞の創始者）の最も有名な発明、ダイナマイトは彼の弟の命を奪ったニトログリセリンをより安全でより安定したものに改良した建設用爆薬として発明され、1867 年に特許出願された。**ノーベルが望んだのはニトログリセリンを安定させることで、戦争を終わらせる発明をすることだった**。決して戦争を作り出そうと思ったわけではない。ところがその後、兵器として使われ、今では「テロ」の道具となってしまっている。

我々を含めて、世界中の人々で平和を望まない人はいないだろうと思います。競って不幸になろうと考える人もいないでしょう。争い事もなく、すべての人がわかり合える世界を望んでいるはずなのです。しかし、現実はそうなっていません。そうならないのは何故なのか。それは、平和を望む気持ちよりも勝る気持ちが人間に起こってしまうからなのです。それは時には「憎しみ」や「欲」となり、人々を突き動かしてしまいます。これは我々の生活にも実際によくあることではないでしょうか。

過去に犠牲になった何万人という人たちを憐れみ、「戦争は悲惨だ」ということを我々は学ぶだけではいけないのです。何万人という犠牲者は、今を生きる我々に戦争の悲惨さを訴えるために、そこに生き、亡くなっていったのではないのです。まず我々が向き合わなければならないのは、「明日があると信じ、必死に生きようとしていた人々が、現実にそこに生きていた」ということではないでしょうか。その一人一人に大切な人がいて、その一人一人を大切だと思っている人がいたはずなのです。そこに向き合ったとき、我々が何を思い、どう考えていくかが大切なのではないでしょうか。

今を生きる我々をはじめ、これから社会で活躍する君たちは、ライト兄弟やノーベルの思いに答えられるような人間になっていかなくてはいけないのです。